
ある日の出来事

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の出来事

【Nコード】

N2970M

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

私は偶然に隣の家の少女を見つけた。

あの日、私はいつものように電車で出かけるつもりだった。

電停には下車した学生がたくさん並んでいた。

そこへ電車に乗るつもりなのか、二人の老人が信号の色が変わるのに電停に向かって横断し始めた。案の定、イライラしているドライバーたちが発車し始める。

セーラー服を着た少女は、手を挙げながらその老人たちのところへ走り、安全地帯に誘導している。私は驚くとともに、その少女の顔を見て驚いた。

「さっちゃんじゃないの」

さっちゃんと言うのは、私の隣の家の少女。最近、学校に行きにくくなつてると聞いたばかりだった。でも、今日、さっちゃんは制服を着て、しかも老人に手を貸すほどの行動力を見せていた。

信号が変わると、一斉にみんなは学校へ向かって歩き始める。

さっちゃんは、老人たちを電車の入り口まで連れて行くと、

「気をつけてね」

そう言ってるようだった。私は感心して彼女の様子を見ていた。

学校へ行くはずの彼女は、二人を見送ると反対側へ渡った。学校とは方角が違う。

ドキドキしてきた。

彼女は軽やかだった足に鎖が繋がれたように、足取りが重くなつた。

行かないのだろうか。

私は妙な老婆心が起きて、彼女の後を追った。

カバンは先程まで軽そうに見えたのに、今は持つてる左の肩が極端に下がってる。

さっちゃんは行くあてがないのか。

「おはよう」

と後ろから声を掛けてみた。一瞬、背中がビクンとなって、彼女は恐る恐る振り向いた。

「あ、林さん」

「さっちゃん、さつきは偉かったね」

「いえ、そんな。危ないように見えたから」

「私なんか冷たい人間で、危ないと思っても足が前に進まなかったわ。さっちゃんはすごい」

彼女は静かに首を振りながら、笑っているがその笑顔の寂しそうなこと。

「私、学校には行けなくて。今から教育研究所に行くんです」

「そうなの」

「林さんはどちらに行かれるの」

「私は暇なおばさんだから、図書館に行ってから、お城でも見に行こうかと」

「お城ですか」

「うん、いつも県庁の上に見えるのに、足を運んだことないから。」

「一緒にどう？」

「えっ、いいんですか」

「いいわよ。その代わり、心配するかもしれないから電話してもいいかな」

「ええ、お願いします」

急に私が電話をしたものだからさっちゃんの母親は驚いていたが、元教師の私にはどこか安心してしているようにも聞こえた。

「さあ、行きましょう」

彼女は外に出るのは久しぶりのようだった。

「カバンが邪魔ね」

「ええ、でもいいの」

さっちゃんは高校二年生だった。

「林さんは学校はお休みですか」

「ううん、もう退職よ」

「そうなんですか」

「急に暇になったから、自分の存在価値がなくなったようで虚しいわ」

「そういうと、大きく彼女は頷いた。」

「私、こんなことして休んでいたらダメなんです」

「どうして」

「もう受験に向かって進まないといけないのに」

「朝から二人も人助けをしている少女は、そこいら辺にはいないわ」

「ははは、林さんって面白い方ですね」

「そうかな」

「こんなに人と話したこと、何か月ぶりだろう」

大手門をくぐると、砂利の中を城への階段が見える。周りには大きな梅檀の木があり、あちらこちらに観光客の姿も見える。

「こつちがいいわ」

「階段でなくて、坂道を行きましょう」

「へえ、こういう道があるんですね」

「順路からいうと逆だけど、お城の天辺に行きたいんじゃないから」

「入らないんですか」

「うん、入りたい？」

さっちゃんは首を振り、人込みは苦手ですとつぶやいた。

「ほら、ここは昔、動物園があったのよ」

「えっ、お城に動物園？」

「そう、不思議ね。でも、私が子どもの頃には遠足という動物園だったわ。だから、よその県に行って、お城に動物園がないと聞いてびっくりしたわ」

おかしそうにさっちゃんは笑っていた。可愛い子だ。

「林さんの家にはよく学生さんが来るでしょう」

「ええ、大きくなった教え子がね」

「あの中に、澤田さんっていたでしょう」

「ええ、麻衣子さんね」

「あの人、私と同級生なんです」

「ああ、そうだったの」

「私、窓から見てて、澤田さんだつて分かったの。林さんにはものすごく笑顔で話していてびっくりしました」

「可愛い小学生だったのよ。私が教えたのは三年生のときだけ。でも、今でもときどき手紙をくれるから会いましょうって返事を書いたら来てくれたの」

「いいなあつて思ったんです。私にもそんな先生いたらなあつて。彼女も学校でいろいろあつて、でも、林さんにはあんなに元気な声で笑つて話してるつて」

この子たちの一番近いところにいる大人、それは先生よね。その人がどこまで子どもたちと話ができて受け止めることができるかで、優しくも強くもなれる。教師は教師で子どもの悩みや喜びから、自分の感性を磨くことができる。アンテナをどこまで伸ばすのか。

「さっちゃん、あのスベリ山を駆け降りるとね、膝が笑うわよ」
「やってみようつと」

制服で大股で走り出す彼女。後ろから見ると、シヨーツまで見えそうな勢いだ。思い切り走つて、バツタリ倒れた彼女。

「大丈夫？」

慌てて駆け降りる私。ダメよ、歳のせいでホンの二、三步走つたら膝がぐんぐんとなつて、思い切り転んだ。

「キヤーツ」

私の悲鳴にさっちゃんは飛び起きて走り寄つて来た。

「林さん、大丈夫ですか」

「心臓が止まるかと思つたわ。ほら、膝が笑つてる」

膝がガクガクと日ごろの運動不足を笑っているようだ。

「私もです」

さっちゃんは気持ちいいなあと寝転がって、

「澤田さんと話そうかな」

「そうね、話してみたら。あの子もさっちゃんと同じでいい子よ。」

貴方達気が合うと思うわ」

「ええ、私、澤田さんの凜とした態度好きなんです」

「そうね、確かに凜としてるわ。凜としても孤独は孤独」

「林さん、今度私も林さんの家に行ってもいいですか」

「どうぞどうぞ、いつでも大歓迎よ。さて、一緒にアイスクリン食べようか」

「はい、買ってきます」

「さっちゃん、お金。今日は私が誘ったんだから奢らせて」

「でも……」

「稼ぐようになったら奢って」

「はい、ご馳走になります」

彼女はスベリ山の向かいにあるビーチパラソルのアイスクリン屋に走った。

私は若いさっちゃんに温かい気持ちや勇気を貰った。彼女はそれに気づいてない。

暇なおばさん、今日も暇がつぶれて良かったわ。

後はアイスクリンを食べるだけだ。また、太るわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2970m/>

ある日の出来事

2010年10月8日14時30分発行